

## くらしの中に音楽を

— 京都にみる労音の発展・衰退・再生 —

加賀美 太記

(京都大学大学院経済学研究科研修員)



京都ミューズ総会 (4.12)

## はじめに

2010年に国内で開催された音楽関連のコンサートは4万9081回を数え、都合2546万人を動員した<sup>1)</sup>。前年比でもっとも躍進したのはポップス分野だが、クラシック分野も金額ベースで前年比2.5%増となっている<sup>2)</sup>。総務省「家計調査」によれば、教養・娯楽関係の出費のうち、映画・観劇等料金が上昇傾向にある。東日本大震災の影響もあり、2011年の教養・娯楽関係支出は全体として落ち込んだが、それでも音楽鑑賞などの文化・芸術関係の催しは、人々のくらしに深く浸透している。

こうした音楽会やコンサートなどが、一般の人々の間に広く普及する先駆けの役割を果たしたのが「勤労者音楽協会」、通称「労音」である。労音は、最盛期には全国で60万人を超える会員を擁し、クラシックを始めとした音楽鑑賞を、人々にとって身近なものにすることに大きく貢献した。しかし、全盛期を迎えた直後から、労音の規模は急速に縮小する。現在では最盛期の10分の1程度にまで縮小しているが、それでも安定的に活動を継続している団体は少なくないし、全盛期よりも会員数を拡大させた団体も存在する。こうした事実からは、音楽鑑賞と日々のくらしをつなぐチャネルとして、労音はいまだその役割を担っているとも指摘することが出来よう。

この労音を前身として、精力的に活動を続ける団体の一つが、本稿で紹介する「京都新音楽協会ミューズ」、通称「京都ミューズ」である。京都ミューズは、労音運動の盛衰と歩調を合わせる形で様々な困難に直面しつつも、それを乗り越えて、今日に至るまで活動を継続している。

本稿では、京都ミューズの代表理事持永耕吉氏と事務局長山下初恵氏のお二人への

インタビューにもとづいて、労音の魅力や文化・芸術活動において果たした役割、今後の展望について紹介していきたい。



公演案内を手にする山下氏（左）と持永氏（右）

## 労音と京都ミューズの仕組み

織物の街、京都西陣。その街中にたたずむ西陣文化センターが京都ミューズの事務所の所在地である。今回、取材に応じていただいた持永氏と山下氏のお二人は、共に1970年代半ばに京都ミューズの前身である京都労音に入会して以来の会員である。まずは、お二人に京都ミューズ、ひいては労音の仕組みについて説明して頂いた。

労音、そして京都ミューズは、端的には会員が自分たちでお金を出しあって演奏会を企画する組織である。音楽鑑賞運動あるいは団体とも呼ばれている。ただ、持永氏は「労音の仕組みそのものは単純なんですけど、言葉にすると伝わりにくいんですよ。音楽鑑賞団体って結局何？って感じで」と述べる。仕組みの説明には苦労されたようで、現在では「質の良い商品を消費者が共同で購入する『生活協同組合』活動の音楽版」と、その仕組みを生協に例えて説明している。持永氏はもともと京都生協の職員であったこともあり、こうした説明方法を思いついたそうだが、わかりやすい

と主婦層などから好評されており、現在ではwebサイトやチラシの説明文として活用されている。

現在、京都ミューズは3つの会員制度によって成り立っている。一つ目はクラシックシリーズ会員である。これは3人以上のグループを一つのサークルとし、サークル単位で入会してもらい、会員価格でチケットを提供する制度である。サークル員については特に決まりはなく、地域の知人でも家族同士でも構わない。近年、コンサート（例会）は年間5～7回程度開催されている。会場となるコンサートホールはおおよそ500名規模であり、そこから会員数を差し引いた分については、チケットぴあなどを通じて一般販売している。その意味で、完全閉鎖的な会員制組織・企画ではなく、外部にも開かれた形になっている。二つ目が、落語セット券会員である。クラシックシリーズの落語版と考えてもらって差し支えない。ただし、こちらはサークル単位ではなく個人単位での入会である。年間4～5回程度の独演会が開催されており、やはり座席の一部が一般販売されている。最後の一つが合唱団会員である。これは前2つとは性格が異なり、年2回程度開催される合唱例会に出演する合唱団に所属している団員を指す。合唱例会では、たとえばベートーヴェン「交響曲第九番」などが歌われている。京都ミューズの合唱団では指揮者もオーケストラもソリストもプロが参加しており、彼らと共演できるというのが大きな魅力になっている。入団にあたっては団費が必要となるが、その内訳は練習会場費や指導者の謝礼等合唱練習に関わることにあてられ、演奏会に関わる費用（指揮者・オーケストラのギャランティや会場費等）はすべてチケット代金でまかなっている。そのため、当日の合唱例会のチケットは自

分たちで販売するなど、主体的なかかわりが求められる。

現在の会員数はクラシックシリーズ会員が203人、落語会員173人(2013年)、合唱団員272人(2012年)であった。会員の掛け持ちもできるため重複もあるが、およそ600名規模で近年は推移している。

通常の会の企画・運営は理事会と事務局が担当している。また、どのような企画を打つかも、会員からのアンケートなどを参考に理事会で決定している。コンサートホールやオーケストラや指揮者のスケジュールは早期に押さえることがスケジュール的に必要であるため、1年単位で企画・立案がなされている。

## 労音の歴史と現在

京都ミューズの前身は京都労音だが、そもそも労音とはいかなる組織で、どのよう

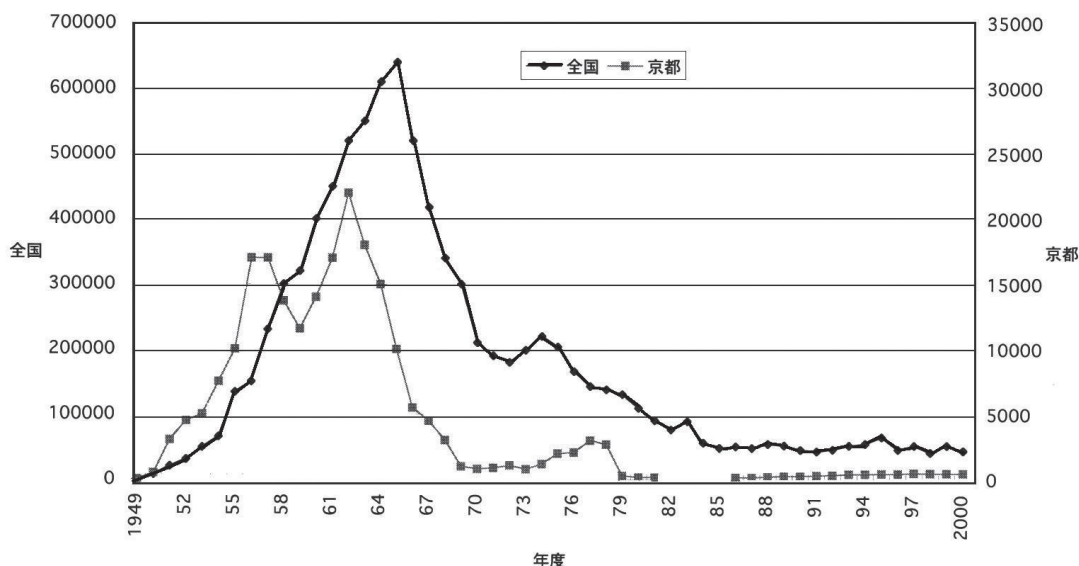
な歴史を辿ってきたのだろうか。ここからは、労音運動と京都労音の過去を振り返りながら、その魅力と意義を考えてみよう。

敗戦後の混乱も落ち着き、人々の間に文化に対する関心が戻ってきた1949年(昭和24年)、日本最初の労音である「関西労音」が大阪で発足した。正式名称は「関西勤労者音楽協会」と言う。

関西労音は、おもに勤労者を中心として、自ら音楽鑑賞を企画する団体として産声をあげた。会員制組織の形をとりつつ、会員相互が会費を支払い運営に協力することで、「よい音楽を安く聴く」「民主的な運営の団体である」ことを理念としていた。こうした根本的な仕組みは今でも変わっていない。

関西労音の設立後、後を追うように全国各地で労音が次々と発足していった。1955年には、大津で第1回全国労音連絡会議が開催され、全国的な運動としての性格がいっそう加速することになった。図表は1949年から現在に至るまでの全国の労音

全国・京都会員数推移



会員の総数と京都ミューズの会員数の推移である。1949 年以来、60 年代にかけて会員数は増加を続け、1965 年の最盛期には、全国 190 団体、会員数 64 万人にまで成長した。拡大を続ける労音からは、歴史に残る名曲も生まれている。1963 年、坂本九が歌いヒットした「見上げてごらん夜の星を」は、関西労音製作のミュージカルの主題歌であった。こうして高度経済成長の真ただ中に労音は黄金期を迎えたが、その後、急速に運動規模が縮小していくことになる。60 年代後半から 80 年代初頭にかけて会員数は大幅な減少を続けた。80 年代半ば以降、横ばいになったとはいえ、かつての勢いには遠く及ばない状況である。現在は、全国約 50 団体、会員総数約 5 万人弱と最盛期の 10 分の 1 程度の規模である。

## 京都労音の設立と発展

京都勤労者音楽協会、通称「京都労音」は 1950 年に発足した、創生期からの労音の一つである。初年度の例会会費は 50 円で、会員数は 467 名であった。関西労音同様に、「よい音楽をより安く」をモットーとし、また音楽を金儲けの手段とせず、人々の人間的成長に結びつけることを理念としており、瞬く間に普及していく。発足から 4 年後の 1953 年には会員数が 5000 名を突破。1954 年には 7500 名、1955 年には 1 万名を超えるなど、会員数 1 万 7000 名を数えた 57 年の第一次のピークにかけて京都労音は規模を拡大し続けた。当時、コンサート(例会)は年間 12 回程度が開催され、会費は 100 円～250 円程度であった。

しかし、1958 年に法人格を持たない財団・社団への課税政策が決定され、労音や前進座といった芸術系団体への課税強化が

図られる。この時期から数年間、京都労音の会員数は減少するが、京都会館のこけら落としがあった 1960 年頃から再び増勢に転じ、1962 年に会員数は 2 万 2000 人を突破し、最高値を大幅に更新した。この年、2000 名を収容する京都会館第 1 ホールで 7 日間連続公演を催すなど、京都労音は最盛期を迎えたのである。

この時期は、京都に限らず全国各地で労音が次々と誕生、拡大していく時代であった。拡大の背景として二つの要因があげられる。

まず、音楽に触れる機会としてのコンサートの貴重さと娯楽としての位置づけの高さがある。労音の拡大期は、人々の生活・所得水準が高度化していく時代だった。所得向上と生活水準の高度化は、人々に音楽鑑賞などの余暇へと足を向けさせる原動力となった。労音運動の拡大を支えたもう一つの背景として指摘できるのが、労働組合の協力である。組合の青年部や文化部などは、生活を豊かにする文化・芸術活動の一環として労音に積極的に関わっていた。その中で、組合における人間的なつながりを背景として運動が拡大していったのである。

## 労音運動の急速な衰退

1962 年に最盛期を迎えた京都労音であったが、その後は急速に縮小していく事態となった。60 年代半ば以降、会員数は劇的に減少、80 年代には単独での例会開催が困難になる状況であった。

こうした急速な衰退はなぜ生じたのだろうか。時代的な背景を筆頭に、いくつかの要因が指摘できる。ひとつは娯楽の多様化である。高度経済成長期の後半には多種多様な娯楽産業が勃興してくる。たとえば、



スポーツ興行の代表格であるプロ野球では、1965 年から巨人が V9 を果たし、王・長嶋という二人のスーパースターが誕生。日本中の注目を集めていた。こうした他産業の登場によって、音楽鑑賞に回っていた余暇が奪われる形になってしまったのである。

しかし、今でもそうだが音楽は人々の生活に欠かすことのできない要素である。ゆえに、もう一つの要因は、音楽に触れる機会そのものが多様化したこと、すなわち LP レコードとテレビの普及である。音楽に触れる素材・機会の多様化によって音楽を家で楽しむという習慣が生まれ、コンサートという「生演奏」から、人々の足が遠ざかる一因になってしまったのである。

そうした消費生活面での変化以外の要因も存在する。その一つが、他の音楽鑑賞団体の設立であり、もう一つが組合員組織率の低下という事態であった。

労音の拡大が続く中で、人々の音楽に対する要求の受け皿となった労音に類似した鑑賞組織が、企業などの支援のもとに作られていった。1963 年には産業界が音協を発足させ、同年 10 月には創価学会主導で民音と呼ばれる音楽鑑賞団体が発足した。これら他団体へと労音会員が流れたことが、労音の縮小の一因と考えられる。また、労音の拡大に協力してきた労働組合の組織率も 70 年代に入ると低下傾向となった。組合の人間関係を通じた勧誘は労音の拡大に貢献したが、このルートが徐々に縮小していったのである。

こうした消費生活の変化、他団体の登場と組合の衰退という変化を受けて、労音は活動規模を縮小していった。しかし、70～80 年代にかけて全国各地にコンサートホールが設立されるなど、文化・芸術の活動環境は徐々に整っていった。そのため、小規模ながらも地方都市でいくつかの労音

が発足するなど、一方的に縮小が続けていたわけではなかった。労音は人々に音楽を鑑賞する機会を提供するという役割を他団体や他産業と分け合いつつも、その役目を全国各地で担い続けていたと言えよう。

## 京都労音から京都ミューズへ

さて、60 年代後半から衰退しつつあった京都労音は、1975 年に一つの決断を下す。それが「京都労音」から「京都新音楽協会ミューズ（京都ミューズ）」への名称変更である。勤労者の組織というイメージの強い労音という名称を外し、運動の大衆化を図ったのである。当時の会員数は平均 800 名であったが、京都ミューズへの名称変更以降若干の持ち直しを見せた。

名称変更による大衆化に活路を見出した京都ミューズであったが、それも長くは続かず、80 年代初頭にはいよいよ組織的に持続が困難な状態にまで陥ってしまう。民主的運営を旨とする京都ミューズの総会は 82 年を機に、以降 92 年まで開催できなくなってしまった。

山下氏はこの時期を「本当にしんどかった」と振り返る。理事会では、借入金を理事たちで分担して受け持って、会を解散しようという声も出た程であったという。

しかし、ここでもう一度原点に立ち返って活動を見直そうという決断がなされた。関西労音などを始め、比較的体力のある団体が共催や主催の肩代わりという形で援助を続けてくれたこともあり、数年がかりで基本理念の議論がなされた。そこで確認されたのは、自らの社会的使命は「人々により音楽をより安く」であり、活動の基礎はサークル活動であるということであった。こうした原点への立ち戻りを踏まえ、1992

年からクラシックシリーズが企画され、会員への働きかけが実直に進められた。具体的には、会社を回り企画案内を置かせてもらう営業活動や、生協のカタログに企画を掲載してもらうといった取り組みが進められた。なお、生協で取り上げてもらうにあたって、会の中でも葛藤があったという。「生協で案内してもらうと『商品』になってしまうじゃないですか。もともとは音楽を金儲けの道具にしない、という理念からスタートしていたこともあって結構悩みましたよ」と山下氏は振り返る。

葛藤もありつつ、実直な取り組みを根気よく続けた結果、会員数は持ち直しを見せた。持永氏はこの要因として、サークル活動を基礎にした良さが出ていると指摘する。「サークルを通じたゆっくりとしたつながりが、個人化が進んだ現代に合っているんじゃないかな。」

一方で、今後の課題としてサークル活動の活性化もあげられていた。サークル活動が例会チケットの配布と、例会後に懇親会を開く程度にとどまっている場合も多く、なかなか会員同士の時間が合わせにくいという事情の中で、どうにか活動を活性化できないか頭を悩ませているという。

一方、発足から63年を数える京都ミューズが現在でも活動していることは、出演者からも高く評価されている。たとえば、演奏者からは、京都ミューズでの例会では観客からの反応が非常にいいという評価を受けている。また、京都で初めて公演される演奏者を積極的に企画する度量の広さが、文化の枠組みを広げるのに寄与している。「京都の人は新しいものにはとにかく慎重ですから。一度やってみて良かったものはキチンと評価してくれるんですけど、最初がね」と持永氏は笑いながらコメントしてくれた。京都では音協が活動を停止し、

民音が事務所を撤退する状況になっている。こうした状況において、京都の町に根差した市民主体の音楽鑑賞組織である京都ミューズの存在は大きな意味を持つだろう。

## おわりに

最後に京都ミューズの魅力を尋ねてみた。お二人ともそろって、生の演奏の持つ力に触れられる点を魅力としてあげる。「演奏会場の雰囲気はまったく違う。プロの演奏家や芸術家を信頼して、とにかく一度来てもらいたい。プロの音楽はまさに飛び込んでくるというのが相應しい。音楽の持つ力を感じてほしい」と持永氏は述べ、山下氏は「仕事の現場で中心になって活躍している人たちにこそライブで音楽に触れて欲しい」と言う。消費の成熟化に伴って、コト消費という体験型消費が注目を集めているが、そうした中で、コンサートという音楽体験を広く市民に提供する京都ミューズの魅力もまた高まっていると言えるのではないだろうか。

無論「スポンサーのいない民主的な団体という意味での困難は当然ある。」とお二人が言われるように困難は多々あるだろう。それでも「魅力があるからこそ活動を継続していきたい。とくに、若い人たちにドンドン来て欲しいですね。」と持永氏は今後の抱負と期待を述べた。今後も新しいものを取り入れ、より多くの人々に「生の音楽の魅力」を伝える京都ミューズの活動が発展していくことを期待したい。

注

1) 日本経済新聞社(2012)『日経業界地図 2013年版』91ページ。

2) 同上。